

【06-21】 ブルー・アルタイ  
ルを一杯



b-svaha

やがて、ルアやリラ、みどりらの人生を映し出していたスクリーンは、次第に暗さを増し、薄れ、すべての映像とともに消えていった。

後には、また、静寂のみが残った。

ひとつの長い呼吸が起き、何もない、意識の海のような場所から、バーのカウンターに座っている自分の体へと、私の意識は戻っていた。

「みどりさん、すべて観させてもらいました。

そういうこと、だったのですね...。

僕は、あなたと子供たちに対して、大変な悲しみを与えてしてしまったようです...。

謝って済む話ではないことは、わかっています...」

謝罪の言葉をつなごうと、みどりの瞳にまっすぐに向き直った私に、

「そのことは、もう、まったく気にしていません。あなたのせいでも、誰のせいでもなく、そのような筋書きになっていたのです。

だから、どうぞお気になさらないで...。

それより、あなたが、こうして記憶を取り戻し、わたしとともに今いることの方が、何万倍も嬉しいことなのですから！」

と、黒い瞳を喜びで潤ませ、みどりは言った。

みどりも、カクテルによって、同様の映像を観ていたらしい。ラジオから聞こえてきた、あの男女の会話も、実は、過去の私たちのものだったのだから、当然といえば、当然な反応かもしれない。

私は、そっと彼女の手をとると、

「ありがとう」

と、だけ言い、顔を下に向けた。

涙が、頬を伝った。

忘却した悲しみの涙というより、許されたことへの感謝、再び出会えたことへの、喜びの涙だった。

みどりと私が、幾転生ののちに、こうしてまた巡り会えた喜びに静かに浸っていると、ルアが、一人の女性を連れて戻ってきた。

「やあ、素敵な時をご堪能中なようだね、お二人さん！

ブルー・アルタイルの出来は、今日も上々だったようだね、AG？」

ルアはそう言うと、AGに向かって軽く手を挙げた。

「大変なものを観させてもらったよ！異次元アンプリファイアーって、ああいうこともできたんだね！」

私は、ルアに事の経緯を少し興奮気味に説明すると、そう言った。

「そうだね。BA（ブルーアルタイル）が何をするか、どう働くかは、飲む人によって様々だからね。決してマイナスの効果は及ぼさないものの、その人の精神的発達状態によって、引き起こす体験は異なるということなんだ。

キミの場合、そうした覚醒の体験と、記憶のリフレッシュが起こったというわけさ。もっとも

僕たちは、それをかなり、期待していたけれどね」  
そう言うと、ルアはにっこりと笑顔を作った。

そして、ひと呼吸置いたあと、  
「キミに紹介しよう。 僕の妻、リラだ。  
彼女とみどりは、今回特別に、我々の船に乗船している。もちろん、キミに会うためにね」  
と、言って、リラと私の顔を、ご満悦な様子で交互に見た。  
リラは、私に手を差し伸べ、  
「永い、永い旅でしたね。お帰りなさい、アル...」  
と、感慨深い瞳でそう言った。  
「覚えていてくれて、ありがとう、リラ」  
私はそう言って、彼女の手を握った。  
「いまの今まで、気づかなかった。いや、本当に、忘れたふりをしていたのかもしれませんが。  
でも、あなた方は、わたしを忘れなかったのですね」  
と、感謝をこめて会釈した。  
「きっと、この旅は、あなたの人生の転機となるでしょう。  
旅の終わりに、あなたは何を見つけるのかしら...」  
そう言うと、リラは瞳の奥を深く探るようにして、私の目をじっと見つめてから、座っている  
みどりの肩にそっと手を置いた。  
「何であれ、それは、きっと、素敵なことに違いないわ...」  
みどりはそう続けると、深くうなづいて、私の顔を見上げた。

こうして、宇宙船での私の第一日目は、無事、終わりの時を迎えた。  
私は、AGの手を握ると、  
「素晴らしい、奇跡のカクテルをありがとう！本当に、感謝している」  
と、お礼を言った。

AGは、私を抱きしめると、頬にキスをしてにっこりと微笑えみ、  
「わたしって、実は、ぱっと見よりずっと優しいのよ！」  
と、おどけて、みんなを笑わせた。

初め、奇異に映っていた彼（女）の外見は、いまではとても自然で美しく思われた。  
私は、ルアの提案した食事のオファーを丁寧に断り、自分の部屋で休みたいと伝えた。さすがに、いっぺんにいろいろな体験をしたせいか、心身ともに、かなり疲れを感じていたのだ。  
私たち四人は、お休みの挨拶を交わし、ルアは、予め用意しておいた部屋へと私を案内した後、残された任務に戻って行った。

私は、シャワーを浴びた後、ベッドの上に横になると、今日起こったすべてのことを、一つ一つ思い返し、検証していった。もう一度、起きたことを整理し、気づくべきこと、知るべきことがあるならば、それを知りたいと思った。突然に与えられたこのチャンスが無駄にしては、天に、宇宙に申し訳ないと感じていた。

私は、ルアとの出会いとなったラジオの混信という出来事から始め、一つ一つ、起きたことを思い出してみた。

それまでは認識したことのない別の現実が、突然、自分の人生に介入し始め、それらが一連の意味をもって繋がり、新たな現実を私に突き付けた。

宇宙や意識、人間や、地球外知的生命体に関する私の認識は、短期間で大きく拡大されていた。

そして、今日の、あの覚醒体験に繋がった。

それは、単に、今回一回の人生における、私とアルタイル星、それにまつわる人々との強い関連性を提示するのみにとどまらず、輪廻転生という、ある種のシステムそのものが、眼前に提示されるという出来事だった気がした。

確かに、ルアやみどりやリラや、アルタイルの人々との関わりにおける私の立ち位置を思い出せたことは、ショックでもあり、辛い部分もあったが、覚醒体験はそれをも超えたものだった。あらゆる過去世は、同一線上に並んでいるだけで、それらのどれかにウエイトを置くのは、私の意思に任されていると感じたのだ。だから、ここから、出来事がどのような展開を辿ろうが、何に出会い、どんな過去が新たに示されようが、私はそれらをただ、楽しみながら迎えばいいのだ、と思えるようになっていた。

私は、覚醒体験の不思議な余韻に包まれ、やがて、安らかな眠りに落ちて行った。

翌あさ、深い眠りから目覚めると、私はまだ、夕べと同じ宇宙船の部屋のベッドの上にいる。

(やはり、これは夢ではない、一つのリアルな現実なのだ。)

確かルアは、僕の夢を利用して現れていると言っていたが、とてもそんな風には思えない…)

昨日までの、地球での、日本での、一サラリーマンとしての、特筆すべきことなどもなく、それなりに辛いこともあり、それなりに幸せな人生の方が、いまの自分には色あせた幻想のように思えもした。

(現実って、何なのだろう…。リアルとは、本物とは、何だろう…。夢とは、幻想とは、バーチャルとは、何なのだろう…)

とても、動いている宇宙船の中とは思えない静かなベッドの上で、そんな想いを巡らしていると、ドアのベルが小さく鳴り、ルアが入ってきた。

「おはよう、アル。ベッドの寝心地はいかがだったかな？」

私のくつろいだ様子から答えを読み取ったルアは、にっこりと頷き、

「では、食堂で朝食にありつこうか！」

と、私の肩をポンと叩いた。

私たちがエレベーターに乗って三階の食堂に着くと、テーブルには、みどりとリラが待っていた。

食堂は、エレベーターを出た左手、宇宙船の半円周を占め、ラウンジ同様、窓側からは船外の宇宙がパノラマで見えていた。もっとも、動きはほとんど感じられない。が、地球から16光年という距離を考えると、かなりの光速で移動しているらしかった。

「おはよう、アル！」

「お目覚めはいかが？」

みどりとリラは、分け合うようにそう言うと、

「わたしたちのオーダーは、もう済んでいるの。二人とも、お腹ペコペコなんですもの」と、リラが続け、みどりがメニューを渡してくれた。

二人とも、昨日よりずっと親しみ易さが増して、まるで、昔から旧知の仲だったような気がした。

私は、できるだけ、地球で食べていた朝食、シリアルやトースト、コーヒーに似たものを選んだ。

シリアルは、アルマイルで栽培されている数種類の穀物とハーブに、温めたミルクのような植物系の液体がかけられていた。

一口食べてみると、微かに甘い香りが、鼻腔から眉間、そして脳内にまで、心地よい微風となって吹き抜けるように拡がった。

鎮静効果もあるようで、カンゾウ（甘草）とシナモンが混ざり合ったような風味だ。

ルアによれば、地球にあるさまざまな植物は、多くは宇宙から種が持ち込まれたり、移植されたものだという。アルマイルからは、カンゾウやその他の生薬系ハーブが移植されたいらしい。

そう言えば、私は小さい頃から、このカンゾウの香りが大好きだった。

母親が一度、リコリスのお菓子を輸入食品店で買ってくれたことがあり、以来、私は、リコリスの夢見るような甘い香りの大ファンになってしまった。それならと、母はあるとき、リコリス狂の私に、ルートビアという炭酸飲料を買ってきてくれた。ルートビアの中に、リコリスの夢見るような甘さを感じ取った私は、ルートビアも大好きになった。

この中にも、カンゾウが含まれていたのだ。

コーヒーのような飲み物は、風味、味覚ともに、地球のものにそっくりだったが、カフェインの体内への影響は、三十分ほどで消えてしまうものだった。のちに、アルマイルのアルコール系飲料についても、同程度の体内残存時間だと教えられた。

コーヒー豆は、プレアデス経由で地球にもたらされたいらしい。

みどりには、小さなオムライスのような、柔らかく黄色の皮で包まれた食べ物が運ばれてきた。それは動物性の卵ではなく、蚕に似た虫の出す繭を、液体状に加工、焼いたものだった。

プレアデス星系には、まだ動物性食品が存在するが、アルマイルではそうではないらしい。食材は、すべて、植物性、穀類、果実類のどれかに属するものだという。

中身にはお米が詰められ、油分のある豚肉風味のキノコを数種のハーブで焼き上げたものが、赤や薄緑色の野菜とともに混ぜられていた。

みどりは、それをスプーンで一口ほおぼると、とろけるような微笑みを浮かべ、

「はい...」

と、一すくいして、私の口にも入れてくれた。

味こそ日本のオムライスによく似ていたが、一口がもたらした満足感、エネルギー・チャージされた感覚は、その比ではなかった。だから、プリン程度の大きさでも十分なのだったと思った。

ルアによれば、地球のお米はベガからもたらされたのだという。お米は、もともと、そうした完全食的な穀物なのだという。

ちなみに、ベガの属する「琴座」という名の元々の由来は、立てた米粒を正面から見て、右上の胚芽の部分をデフォルム、強調表示したものに七本の弦を張った、琴のイメージなのだそうである。

つまり、琴の弦＝玄米の胚芽部分ということで、一粒のお米がそのオリジンなのだそうである。だとすると、日本とのつながりも、相当に深いということになる。

【2014-06-21】 ブルー・アルタイルを一杯

<http://p.booklog.jp/book/86985>

著者 : b-svaha

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/b-svaha/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/86985>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/86985>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社ブクログ